

**事例2-9 雄勝硯（すずり）生産販売協同組合の事業再開（宮城県石巻市）**

- 1** グループ補助金を活用して、被災した重機や道具類を再生・調達して共同利用
- 2** 砕石業者の廃業を受け、組合自ら砕石を担うため、国・県に許可申請を提出
- 3** ふるさと雇用特別基金で採用した職員を、見習い職人として雇用

**事業の全体工程と現況**



<b>事業主体</b>	雄勝硯生産販売協同組合
<b>プロジェクト規模</b>	約3,000万円（平成24年度売上） 組合職員5名
<b>事業費</b>	5,000万円 うち中小企業等グループ施設等復旧整備補助事業 1,500万円、 経済産業省伝統工芸品産業復興対策支援補助金1,400万円、自己資金2,100万円

**(1) 事業の概要**

かつて全国一の生産量を誇った雄勝硯。原料に含まれる石英や銅などの、墨を削る役割の成分のバランスがよく、職人による彫りや磨きのレベルが高いことから、昭和60年には、国の伝統工芸品に指定され、以降、高いブランドバリューを誇ってきた。

震災後は、津波によって町が壊滅。硯産業従事者の多くも被災し、現在では、硯の生産に取り組んでいるのは、組合員従事者ひとり、組合員以外で個人がひとりという状態だ。ピーク時4億円だった生産高も、3,000万円程度にまで落ち込んだ。



がれきから回収・再生された雄勝硯 (平成25年2月撮影)

雄勝硯の壊滅をかううじて防いだのは、やはり組合や関係者の努力だった。被災した出荷待ち商品に関係者やボランティアががれきから回収し、使えるものを選別、修復して販売している。

生産再開に必要な機材や道具は、グループ補助金や経済産業省の予算を活用し、総額約5,000万円をかけて修理・再生している。ただし、町の復興計画がまだ決まらない状態のため、建物の建築などはまだできない状況だ。

そんな環境でも、「今あるものでできる分をやっていく」と雄勝硯生産販売協同組合事務局長の千葉隆志氏は言う。硯は職人の手が必要なので、職人たちが各避難地域にばらばらになっている現状では、すぐに掘ることはできない。そこで、工場にあった材料をできる限り回収し、それを素に石皿等工芸品の生産・販売に取り組んでいる。また、震災前作っていた雄勝石スレートは、平成24年に完了した東京駅のリニューアルにも、1万5,000枚が屋根材として用いられ、注目を浴びた。

硯生産の本格再開はまだ先だが、平成25年4月には、新たな作業スペースをプレハブで設置し、回収・保管していた石もそこに移動して作業の一部を再開できるようにする。一步ずつ、いまできることを丁寧に進めている。

## (2)プロジェクトが直面した課題と解決のポイント

### 1 グループ補助金を活用して、被災した重機や道具類を再生・調達して共同利用

津波によって、硯を掘るためのノミなど、細かな道具類はすべて流され、大型機械もすべて水をかぶってしまった。

グループ補助金を活用して、再生可能な機材は横浜でオーバーホールし、個人所有だった荒彫機は、被災した3台から使える部品をかき集めて、1台に再生した。それらを共同で使用することでひとまず、生産を再開している。また、トラックや重機についても、グループ補助金を活用して調達したものを組合内で共同利用している。



雄勝石を活用した加工品  
(平成25年2月)

現在生産している硯は、被災したものの再生品。硯以外には、香立てや花器、ストラップといったインテリアや小物等に加工して販売している。また、震災前から開発していた、雄勝石を用いた石皿「玄昌石皿」はフランス料理店等からの注文もあり、新たな収益源として、ネット販売や海外進出も視野に入れて販売を拡大する方針だ。硯と比べて生産が容易であることから、復興の足がかりとして期待されている。

### 2 砕石業者の廃業を受け、組合自ら砕石を担うため、国・県に許可申請を提出

地震に伴う地滑りで道路が途絶し、原料となる雄勝石の採石ができなため、現状では、震災後にボランティアの協力ができから回収した原料を使用している。

また、震災の影響と高齢を理由に採石業者が廃業することになったため、組合自体で採石を担うことにした。国立公園を含む国有林地域からの採石のため、現在は国や県に採石の許可申請を提出するところだ。東京駅の屋根材や法務省の旧本館等、建築遺産の復元工事等にも必須の素材であることも訴え、一日も早い許認可にむけて努力している。

### 3 ふるさと雇用特別基金で採用した職員を、見習い職人として雇用

元々高齢化が進んでいた硯職人だったが、震災以降、長い避難生活を強いられる中で事業再開の意欲も持てずにいる人も多い。組合でも全職員を一旦解雇せざるを得ない状況だったが、ふるさと雇用再生特別基金事業の枠組みも活用して男性職員2名を採用し、うち1名を職人見習いとしている。

現段階では、後継者といえる状況ではないが、できることから始め、段階的に硯を掘る作業にも指導を進める計画だ。その他の人員も事業の再建にあわせて採用し、材料の切り出し、加工、硯製作といった工程に従事するスタッフも増やしていく考えだ。

#### コラム：一日も早く人々が暮らす街へ

生産量がピーク時の10分の1にまで落ち込んだとはいえ、機械・人材に壊滅的な被害を受けたなかで、組合員で助け合いながら事業再開まで漕ぎ着けることができた。

いま何が必要か、という問いに、「仕事ができる環境がほしい。今は、仮設。本設ができる環境作りをしてもらいたい」と組合事務局長の千葉氏は言う。

4,300人いた人口は1,200人に減り、その大半が避難生活を続けている。雄勝硯の再生は、街の再生なくしては意味を持たない。人々が暮らす街、働く街を一日も早く再生する。そのための一刻も早いさまざまな意思決定が求められている。